せているが、歴史教育独立のねらいは、前述のごとき「内なる国民統合」である。コインの表裏にたとえれば、表が「国際化」＝「世界史必修」であり、裏が「愛国心」＝「日本史必修」＝「わが国固有の伝統」としての天皇制である。

経済大国日本が国際舞台において激しい国際競争に打ち勝ち、活躍できる国際人＝日本人＝企業戦士を支えるしっかりした「内なる統合」、それは、財界の求める「国際化」と結びついた新たな天皇制国家主義に帰結するのではなかろうか。

ソウル五輪と天皇の容態を報ずるマスコミの異常さは、それぞれの実像以上の世論操作に、社会科解体の意味するものを強く感じざるを得ないのである。

（にたに　さだお＝上越教育大学、八八年九月三〇日稿）

〔表紙絵について〕

石臼（いしうす）

大平荘一

「たのまれた新潟の風土に関係する表紙絵……私の家は県内にあるのだから、私の所で古くから使われてきたものは新潟の風土に根ざしたものにちがいない、こう勝手に解釈して」はじめたこの表紙絵シリーズもこれで四回目、最終回だ。今回は石臼。職人が岩石をノミで刻んだものだ。

振り返ってみると、一回目が「みの　と　かさ」、二回目「ハエトリ器」、三回目「座繰」（私のスケッチのコピーから印刷されて不満）。意図したわけではなかったが、草、ガラス、木、石とみんな材質が違っている。そのことに気がついた瞬間、手仕事を通した自然と人間とのかかわりがイメージできて、納得したような気分になった。

さて、この石臼、木製の引き手でまわすのだが、幼少の頃、大豆をひいてキナ粉を作ったことを思い出す。今はひくことはないし、世間では庭などの装飾の一部に使われている場合もあるようだが、わが家では、今でも槌で大豆をたたいて「打ち豆」をつくる際の台になったりして、かろうじて役に立っている。

（おおだいら　そういち＝中越高校）

お詫び　編集部と印刷所の連絡が十分でなかったために、第一九号の表紙絵（『座繰』のスケッチ）が、大平荘一氏の描いた原画ではなくそのコピーで印刷されてしまいました。大平氏に深くお詫びするとともに、その旨読者のみなさんにお知らせいたします。

（にいがたの教育情報編集部）